

売薬の意匠あれこれ

北多摩薬剤師会会長、立川市薬剤師会会長代行 平井 有(ひらい たもつ)

その3 ■ だるま(達磨)

今回は「だるま(達磨)」のデザインを取り上げます。
 正月の縁日やだるま市などで売られている「だるまさん」は、中国禅宗の開祖とされている達磨大師の姿を模した縁起物ですが、江戸時代頃から一宗派を超え、広く日本人に親しまれてきました。達磨大師は9年もの間、壁に向かって座禅を続けたため手足を失ってしまったと伝えられ(医学的には廃用性筋萎縮と想像される)、ここから根気よく、辛抱強く一心を貫く象徴として手足の無い形の置物が作られたようです。一方、日本各地に底が丸く重心の低い円錐のような形の倒してもすぐに起き上がる「起き上がり小法師(こぼし)」という玩具があり、これらと「だるま像」が渾然と一体化し、今の「だるまさん」になったようです。
 古来より火や血の色である赤(朱)色は病や災いを除く魔除けの力があるとされ、赤い「だるまさん」が作られるようになりました。昭和に入ると赤以外にも白や黄色、金色など色とりどりの「だるまさん」が作られました。現代でもまず片目を書き入れて祈願が叶うと残りの目を書き入れる習慣は選挙や受験でよく行われています。
 薬の世界ではこのように「だるまさん」の赤に病除けの意味があること、寝てもすぐに起き上がることから主にかぜ薬や解熱鎮痛薬のパッケージに多用されてきました。一見、強面(こわもて)なものからコミカルなものまで様々あり、日本人の創造性の豊かさが見て取れます。では、いろいろな「だるまさん」をご覧ください。



置き薬の預け箱、景品の猪口(ちよこ)と達磨型の文鎮



袋がだるま型になっている薬袋



優しい表情のだるまさんも



存在感のある黄色だるま



手塚マンガを連想させる“ヒゲだるま”



太い眉が印象的なイケメンだるま



体温計を担いで解熱剤をアピール



効きの早さを連想させる時計と一緒に



めずらしい“姫だるま”が目を引く



ネーミングもイラストもマンガチック



赤玉と黄玉の2種入りを強調したデザイン